

夜高節歌詞・庵唄資料

(一) 夜高節歌詞資料

以下に、調査において収集された歌詞のうち本文に載せてないものを掲載する。

【文献から】(佐伯安一「民俗手帖第五冊」)
大和心よ様の花よ元の使を切りし時宗

【町内に配布されたと思われる歌詞集から】

高い山から 谷底見ればヨ 瓜やなすびの ササ花盛り
福野夜高と あの娘の袖はヨ 上り下りも ササはなやかに
恋の綾織り 紫紺に染めてヨ 夜高若衆に ササ着させたい
太鼓どんど鳴りや 田んぼのぎやわすヨ 夜高みたいと ササさわ
ぎ出す

五月夜空に 太鼓がひびきやヨ 月も顔出す ササ夜高見に
織った白布か 越路の雪かヨ 福野織姫 ササ雪の肌

夜高祭に 二七の市ヨ 福野どころ ササ 米どころ
広い青田を 夕日が染めてヨ 暮れりや夜高の ササ花が咲く

汗と気根で 絞り出す緋ヨ 一つ一つが ササ主の顔
嫁女ほしけりや 二七の市はヨ 器量愛嬌の ササ粒ぞろい

主の心を夜高に染めてヨ 染めた心に ササ歳の市
年はとつても 他国にいてもヨ 夜高祭は ササ思い出す

主は今頃 起きてか寝てかヨ 思い出しか ササ忘れてか
千代に八千代に栄ゆるものはヨ 君が御稜威(みいつ)と ササ大

和魂

安居山から らっぱを吹けばヨ 夜高行燈 ササ呼びかへす

今年や戦地で御国の為にヨ 命さゝげた わがますらおよ

五月夜空を万燈で焦がすヨ 福野夜高の ササ灯が恋し

娘島田に蝶々がとまるよ とまるはずじゃもの ささ花じゃもの

【布袋和彦整理とあるうち「下品な歌詞」とされたもの】

今年や 二十四日 津沢(つざわ)の祭りヨ みこし鏡(かがみ)は
サ、鍋(なべ)の蓋(ふた) (注:「津沢町を嘲笑った歌」とある。)

笹(ささ)で舟して 糸(いと)マを乗せてヨ 山田かかいつきやサ、
舟返(かや)る

(注:「昔 小矢部川の笹舟で、大家の坊ちやんと下町の糸繰り娘
のやるせない逢い引、恋歌」とある。)

山で床(とこ)すりや 木の根が枕ヨ 木の根 はづれてサ、草枕
夕(ゆん)べ 夜が良(よ)うて 河原で寝たらヨ オチョマ 蜂(は)

ちや刺(さ)いてサ、眼がさめた
主は 今頃 起きてか寝てかヨ 思い出しかサ、忘れてか

坊主 頭に 木枕(きまくら)をさせばヨ 南瓜(かぼちゃ) まな
板にサ、乗せたよな

嫁(あね)ま しゃれんのもんじや 下駄(げた)の歯(は)が 欠(か)
けるヨ 欠けりや 買て貰(もらえ)サ、あんさまに (注:「今

の若い人は、欠けりや、おわんさんに:と云っているし嫁まは、芸者
になつてゐる。元唄は、右の通りが正確なり」とある。)

べべちよー かかえちよーと 山鳥(やまどり) ほえるヨ 今に
させますサ、新(あら)ばちを

今年やどでもこうでも嫁にせにやならぬよ 乳もでこなるササ毛も

生える

【御蔵町の取材より】

ごぞろさん おじじとおばばが 横町の墓場で 何じやら なされ
たそうなおちややおちやられ

【夜高節新歌詞 入選作 昭和六二年五月 福野夜高保存会（佳作の
み、最優秀賞と優秀賞は本文掲載）

五月夜空を 夜高で染めりやヨ 唄と太鼓が ササ勇み出す
来たか見たかよ 福野の夜高ヨ 心嬉しや ササ二人連れ
町は七色 行燈染めてヨ 明日へ希望の ササ虹が立つ
酔いがまわれば 祭りの客もヨ 習いおぼえた ササ夜高節
笛や太鼓に 先ぶれさせてヨ 夜高祭の ササ灯が進む
バチの響きに 拍子木（き）の音が冴えてヨ 唄と太鼓で ササ
行燈（だし）が行く

砺波平野の 夜空を焦がすヨ あれは福野の ササ夜高灯か
祭囃子に 夜高が揺れてヨ 上り下りの ササ勇み肌
安居山並み いつしか暮れてヨ 町は夜高の ササ灯が招く
ひびいまごいは 昼間の空にヨ 夜高行燈 夜空に映える

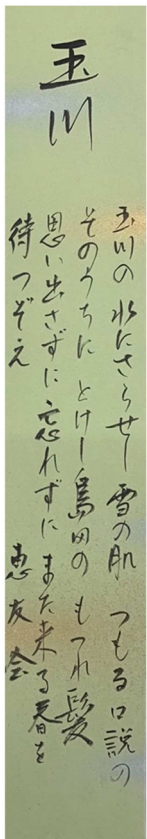
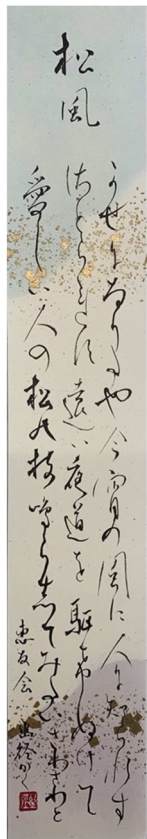
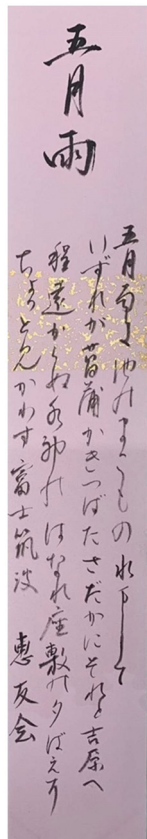
【夜高節新歌詞 入選作 昭和六三年五月 福野夜高保存会（佳作の
み、他入選は本文掲載 応募数一七七）

福野夜高に 諸肌抜いてヨ 叩く太鼓の ササバチさばき
夜高み初めて 真つ赤に燃えてヨ 町を彩る ササ花つつじ
五月夜空を 夜高で染めりやヨ 粋な若衆の ササ歩がおどる
福野夜空に 万灯が競うヨ 夜高祭りの ササ人の波
五月花咲く 安居の山にヨ 夜高太鼓の ササ音もひびく

福野よいとこ 一度はおいでヨ 春は夜高で ササ秋は菊
夜空七色 万灯がゆれてヨ 夜高ばやしで ササ更ける町
町のさかえと 夜高の祭りヨ 古いも若衆も ササ共にする
嫁にやろうか むこ殿取るかヨ 夜高若い衆は ササよい男
夜高万灯で 夜空が映えるヨ 福野若い衆の ササ意気あがる

（二）庵唄資料【短冊・色紙】

【城端の短冊 長谷川一司蔵】



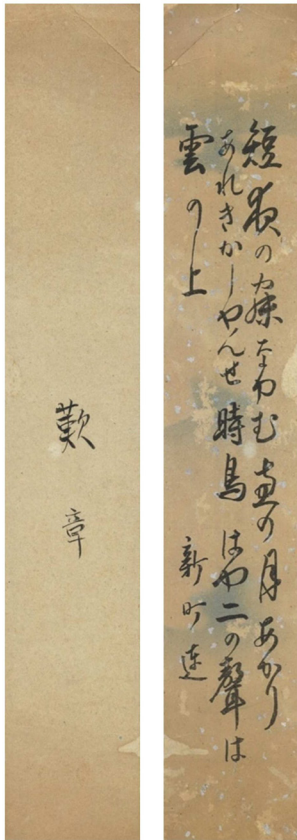
1. 城端短冊 長谷川氏より

短夜の 寝なやむ恵の月あかり

あれきかしやんせ 時鳥

はや二の声は雲の上

(新町連) (往蔵久雄蔵)



2. 新町短冊 (表裏) 往蔵氏より

朝靄の 晴れ渡り多る 春の野に

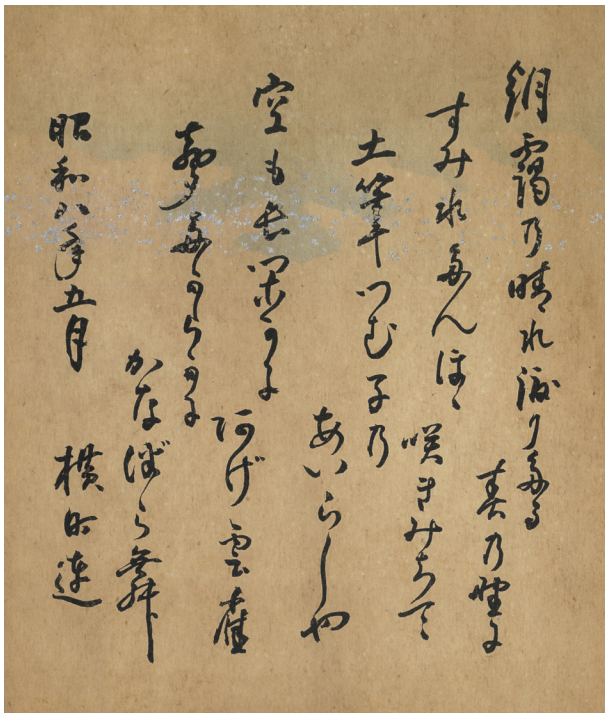
すみれ多んぼぼ 咲きみちて

土筆つむ子乃 あいらしや

空も長閑かに 阿げ雲雀

声多からかに かな津ら舞

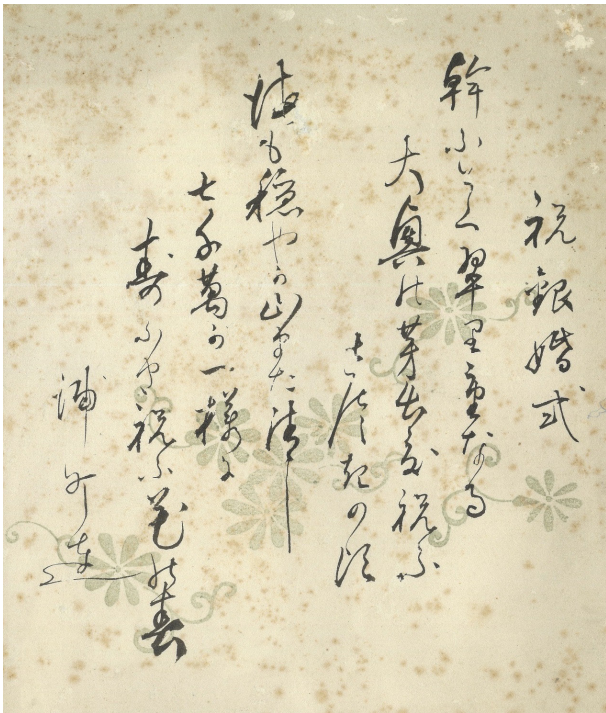
昭和八年五月 (横町連) (往蔵久雄蔵)



3. 横町 (S8.5) 往蔵氏より

祝 銀婚式

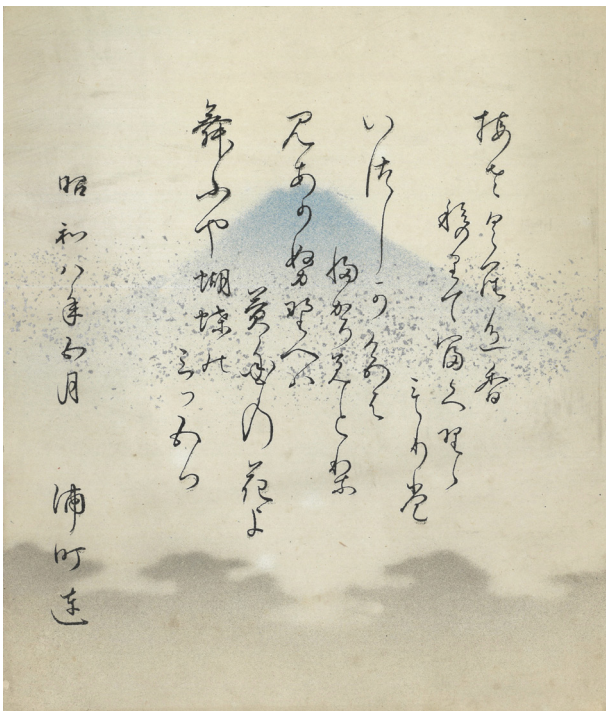
幹ふとく 翠里みどり重なる 大奥の
芽出度祝ふ さ徒起つの頃
流も穩やか山また清し
七千萬が(か)一様に
寿ふき祝ふ 花の春
(浦町連) (往藏久雄蔵)



4. 浦町 (S8.5) 往藏氏より

梅さくら 色香移りてふくののもり堂ど
いつしか宮は ふかみどり
見あかぬ野へハ 黄白の花よ
舞ふや蝴蝶の 三つ五つ

昭和八年五月 (浦町連) (往藏久雄蔵)



5. 浦町 (S8.5) 宮崎氏より

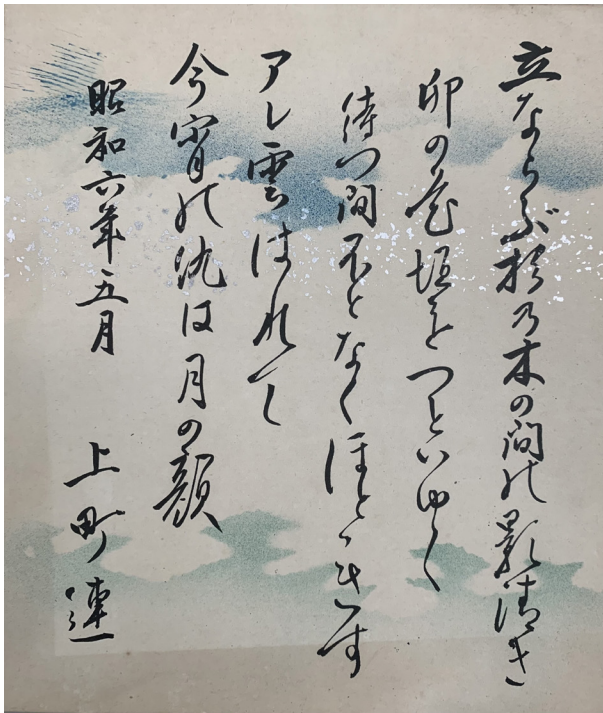
立ち並ぶ 杉の木の間の 影清き

卯の花垣をつどい行く

待つ間ほどなくホトトギス

アレ雲はれて今宵の仇は 月の顔

昭和六年五月 (上町連) (往蔵久雄蔵)



6. 上町庵唄色紙 (S6) 往蔵氏より

時鳥

庭の夏草先きりあい

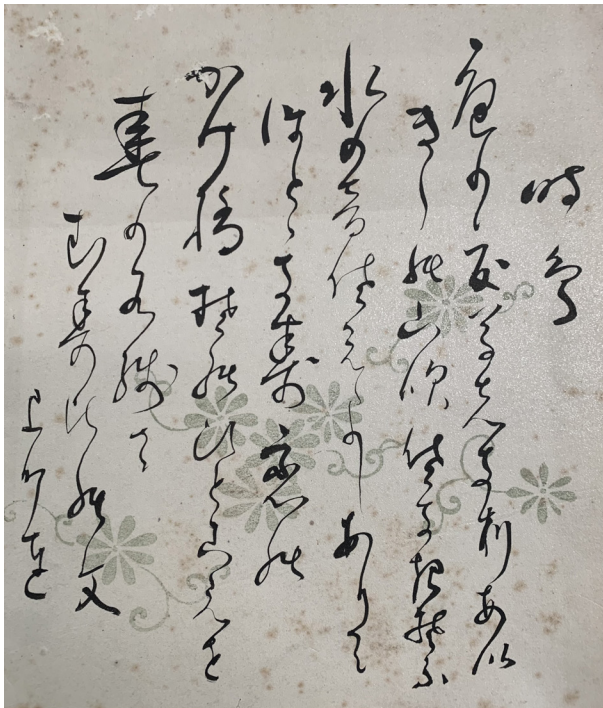
きしの山吹 さききそふ

水の音さえ よしありて

ほととぎす 恋のかけ橋 そのひとこえを

春の名残は むすひの文

(上町連) (往蔵久雄蔵)



7. 上町庵唄色紙 往蔵氏より

時鳥によせて祝ふ 昭和十年乙亥 新町連

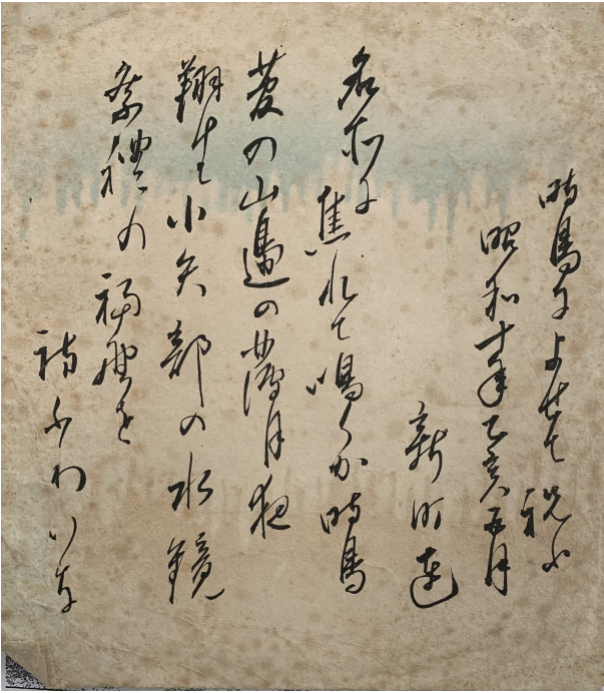
名所などころに焦こがれて鳴くか時鳥

菅の山辺の薄月夜

翔はけて小矢部の水鏡

祭礼まつりの福野を訪まふわいな

(新町連) (大塚保夫蔵)



8. 新町 (昭和10年)

初夏の青葉ににほうこの里や

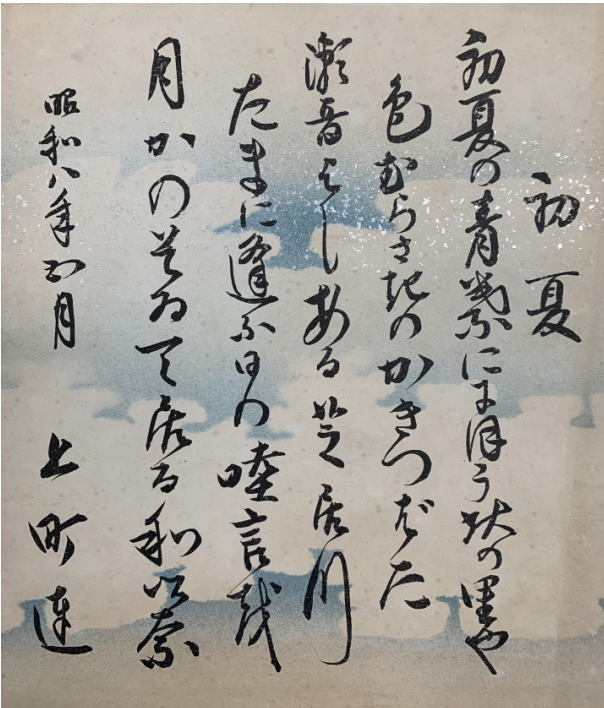
色むらさきのかきつばた

瀬音はしある芝居川

たまに逢う日の睦言を

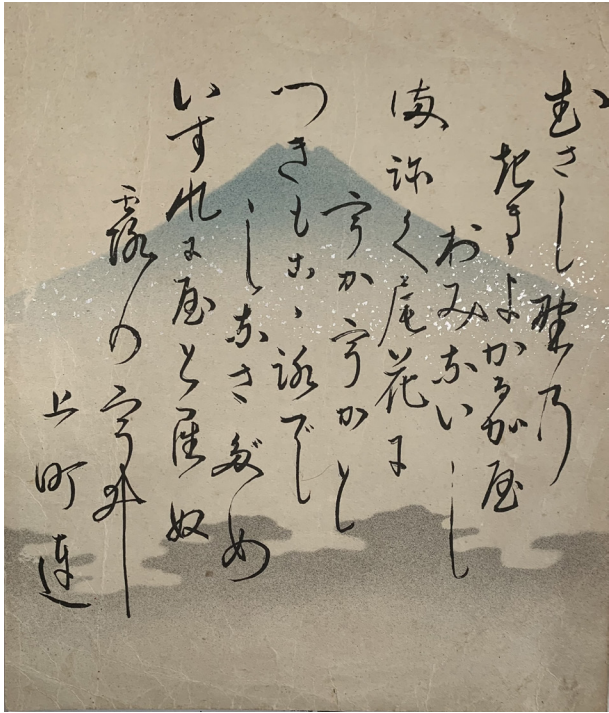
月がのぞいて居るわいな

昭和八年五月 (上町連) (往蔵久雄蔵)



9. 上町 (昭和8年)

むさし野の ききよかるかや おみなえし
まねく 尾花に うかうかと
月も心で品さだめ 何れにやどらぬ 露の上
(上町連) (大塚保夫蔵)



10. 上町庵唄色紙 大塚氏より